

七 実 験

初期の社会主義者たちが「空想的」と極印づけられたのと同じ単純なやり方で、一八三〇年頃および一八四八年頃に、イギリスおよびフランスの労働者の最もすぐれた一部の者をわきたせた協同組合運動の二つの大きな波も、「ロマンチック」という極印を押されたが、それはこのロマンチックという概念の下にある人生観の夢想性や非現実性を理解する限り、前の場合以上に正当なことではない。それらの運動は、近代経済の機械化にともなう根深い危機の表現であって、イギリスのチャーティズムやフランスの二つの革命の如き政治運動にくらべてもその意義の劣るものではなかった。しかしそれらは、憲法や権力秩序の変革を求めたこれらの政治運動とはちがって、それなくしては、法的関係のいかなる改変も社会主義の実現とはなりえないような社会的現実を形成することから開始しようとした。協同組合運動は社会改革における人間の役割をあまりに高く考え、周囲の事情をあまりに低く考えるものとして非難されてきた。しかし一定の状況において人間にどれだけのことが可能であるかを体得するには、この状況を改変するために、非常非平凡なことを為すように人間に求める以外にいかなる方法もない。

たしかに協同組合運動の「英雄的」形態は、組合員が、どっちみち永続的にはつくしえなかったような忠誠と犠牲とをつくすことを当にした。しかしこのことから、忠誠と犠牲とは政治的変革の如き例外的な時期には見出されるけれども、日常の経済生活においては十分に見出されないとはならん決定されない。英雄的協同組合運動の創始者たちは、「現実の人間の代りに理想の人間を考えた」と嘲笑することは容易である。しかし「現実の」人間は、彼がそれまでやりぬく力がなかった、あるいはないと信じていた任務を遂行することを期待されるときこそ、「理想の」人間にいつそう近づくのである。——「より高い目的とともに成長する」、あるいはむしろ成長することができるといふことが真実であるのは、個人だけについてではない。そして結局は、目標と目標にたいする意識および意志にかかっているのである。現代協同組合の英雄時代は、社会の変革を当にしたのに、その技術時代は本質的に個々の協同組合事業の経済的成果を当にしている。前者は失敗に終わったが、しかしそれをもってその目標と方途とに判決がくだされたのではないし、後者は大きな成果を収めているにちがいないが、しかしそれらの成果は実のところ目標に向って進む途上の段階であるようにには思えない。官僚制化された協同組合の第一線の運動家は最初の協同組合についてこう語っている。「社会的信念の燃えさかる焔を伝えたこれら謙虚な人たちおよびこれら誠実な人たちにわれわれの満腔の敬意と感嘆とをささげよう。……だが英雄主義は、それだけでは経済的成果をもたらすに適した精神状態で

はないことをわれわれは認めよう。」なるほどそうかも知れないが、われわれはまた、経済的成果は、それだけでは人間社会の構造的更新に導くに適した業績ではないことを知るのである。

上記の二つの時代の協同組合運動から、協同組合の三つの主な形態（信用協同組合は別にして）、すなわち消費協同組合、生産協同組合、および生産と消費との結合にもとづく完全協同組合（Vollgenossenschaft）に関する二三の年代をあげることしよう。一八三〇年前後。今日の意味での最初のイギリスの消費協同組合が、医師ウィリアム・キング⁽¹¹⁾の思想の影響の下に創立された一八二七年。ビュルシェ⁽¹²⁾の計画によって最初のフランスの生産協同組合が設立された一八三二年。これら両年代の間に、オウエンとその一派のアメリカ及びイギリスでの移住地建設の実験が行われた。一八四八年前後。最初にロッチデールの織工たちの消費協同組合（一八四四年）、ついでルイ・ブランの「国立工場」⁽¹³⁾およびこれに類するもの（一八四八年）、そして最後に茶番狂言的なものとしてカベール（カベールは消極的な意味での現実的、ユートピアンであり、人間的基礎について真の理解をもたない社会建設家であった）のミシシッピ沿岸における悲喜劇的な「イカリア」計画が行われた。これらについて、ここでは「ユートピア」社会主義実現の試みとして、本書の意図に必要と思われることだけ述べるであらう。

キングとビュルシェとはともに医者であり、また二人ともオウエンがその生涯の主な任務として反宗教的闘争を行ったのとは反対に、敬虔なキリスト者であり、前者はプロテスタント、

後者はカトリックであった。このことは重要でなくはない。社会主義は、オウエンにとっては理性の果実であったが、キングとビュルシェにとっては、公的生活におけるキリスト教の教えの実現であった。二人はともに、ビュルシェがいうように、キリスト教の教えを「社会制度に転化」すべき時期が到来したと考えた。この宗教的な根本の感情は二人の態度全体に深く影響しており、クエーカー教徒に親しく、また彼らといっしょに働いたキングにおいては、それが言葉の調子にもおよんでいた。語る言葉の節々にも、仲間にたいする、その魂と生活にたいする具体的直接的な、心の底から湧き出る思いやりが感じられるのである。

今日キングは、忘却から救い出されて正當に、イギリス協同組合の最初のかつ最大の理論家とよばれるようになった。だが彼はなおその上に、話す事柄の本質をすべての人びとにわからせるような、核心にふれた言葉を使う天賦の才をもっていた。私は協同組合に関するあらゆる文献のなかで、キングが、一八二八年から一八三〇年にかけて、彼の思想の実現に活動する人びとを啓発するために執筆刊行した「協同者」という二八冊の雑誌ほど、一般向でしかも同時に古典的なものはほかに何一つ知らない。さらにキングは、彼よりも科学的であるが、もっと抽象的にものを考えたウィリアム・トムスン⁽¹⁴⁾（リカルド派の社会主義者）を除いては、同時代の何人にも見られないような、深くかつ明確な社会主義的認識を抱いていた。彼は、「どのような大きさに成長するかも知れない樹木の根」である労働から出発する。労働こそは「この意味のすべて」

である。労働者階級こそは「このものを独占している。」いかなる力も彼らからそれを奪い取ることはできない。なぜならば、一切の権力が、「労働者階級の労働を指図する権力以上の何ものでもない」からである。労働者に欠けているのは資本、すなわち機械の自由な使用と、機械を使って働く間その生計を維持するだけの力とである。しかし「資本はすべて労働からつくりだされる」のであるが、「それだけではなんにもならない」し、それが生産的であるためには労働と結びつかなければならない。この資本と労働との結合が、現在は「資本が労働者を動物のように売買する」ことによって行われている。労働者自身こそ真の結合すなわち「自然的団結」をもたらさるのであるが、ただ彼らはそれを知らない。彼らは、団結し、協力し、共同の資本をつくり、独立するときのみ、それをなすことができる。キングは彼より前にトムスンが表明したところの、労働の生産形態としての協同という思想を熱心にとりあげた。「労働者たちが資本を基礎とするかわりに労働を基礎として団結するやいなや、彼らは多くの方向にセンセーションをまき起すであろう。そしてそれが多くの雇主たちの目をくらませることは請合いである。」労働者たちは団結さえするならば、彼らの必要とする用具すなわち機械を手にいれ、彼らの協同組合自体において生産の主体となることができる。彼らは土地をも手にいれることができる。キングは消費協同組合のうちに一つの開始しか認めず、彼の目標は、トムスンの目標と同じように、完全協同組合にあることをはっきり語っている。十分な資本を用いるこ

とができるやいなや、「組合」すなわち消費協同組合は、「生活するための土地を買い、みずからその土地を耕やし、好む作物を生産し、かくして衣食住に関するすべての欲求を満たすことができる。そのとき組合は共同体コミュニティとよばれるであろう。」キングはまた労働組合にその貯蓄で土地を買い、失業した組合員たちをそこに定住させ、まず何よりもみずからの欲求を満たすために生産する共同体を建設するようによびかけている。この共同体は、成員の特定の関心や機能だけでなく、彼らが生活をとまにすることを欲し、またそれが可能である限りにおいては、生活自体を包容するであろう。しかし生活共同体は、完全協同組合においては十分に実現されうるにしても、その精神的傾向からすれば、消費協同組合員相互の関係のうちにすでに存在しなければならぬであろう。そのさいキングが考えているのは、非人格的な連帯だけでなく、なお、一般には潜んだままであるがときには現実のものになろうとしている人格的なつながりであり、「新しいエネルギーを取得して活動し、ときには熱狂にまで高まることの可能な同感」である。したがってこのようなつながりを結ぶことのできる人びとのみが成員たることを許されるであろう。協同組合の基本的原則は、キングにとっては、人間と人間との間の真の関係を確立することである。「誰でも協同組合に加入するときは、仲間の人々との新しい関係にはいることになる。そしてこの関係はただちに道徳的および宗教的なあらゆる制裁の対象となる。」このような理想、このような「英雄的」要求は、のちに組合員の数を増し、技術

化や官僚制化が進展するとともに、支持されなくなったことは自明的である。しかしそれは、社会の構造的更新の見地から見れば、部分的協同組合では十分でないことも関係がある。

一八三〇年ウィリアム・キングが「協同者」の刊行を中止した当時、彼の教説の影響のもとに三〇〇の組合が成立していたが、これら組合の大部分は、指導者の一人が一八三二年の大会で語ったように、組合員の間の統一と実際の活動とを欠き、またそこに強く行われていた「利己的精神」のために、長く生命を保つことができなかった。消費に基礎をおく協同組合の決定的な発展は、ようやく一八四四年にはじまった。この年、あるストライキが挫折してから間もなくイングランドをおそった重大な産業危機に際して、ロッチデールの町に少数のフランネル織工や他の職業の代表者たちが集まり、たがいにくたずねた。「われわれは窮乏から身を救いだすために、何をするができるだろうか。」彼らのなかには、各自が自分でやりはじめなければならぬと考えた若干の人々もいた。これはつねに、またあらゆる場合に正しいことである。なぜなら自分でやりはじめることなくしては何事も成就されえないからである。ただ人びとは、そのことがいかに重要であるにしても、なすべきことの一部にすぎないことを知らなければならぬ。彼らはこれを知らなかったために、飲酒の楽しみを絶つことを提議したりした。それはもちろん仲間の者を納得させることはできなかった。(それにもかかわらず、そう

した提議がいかに重要視されたかは、その後「ロッチデールの誠実な開拓者」の規約で組合の議事日程のなかに、禁酒ホテルの設立が記載されている事実からも推定されよう。また憲法の改正と権力の掌握を目ざしたチャーチスト運動にしていた人びとのなかには、労働者階級が正当な立法への関与を勝ちとるため政治的行動に参加しなければならぬと提唱する者もいた。しかしチャーチスト運動はすでに峠を越していたし、また人びとは、政治的闘争は必要ではあるが、十分なものではないことを知っていた。集った人びとのうちでオウエン派の二三の者は、彼らにとってもはやイングランドにはいかなる希望も存在しないし、外国に移住して(おそらくアメリカでの新しい移住地建設の可能性を考えていた)みづから新しい生活を建設しなければならないと言明した。しかしそれもまた斥けられた。というのは、次のような感情が優勢だったからである。すなわち「実行する」というのはここで実行することであり、危険を前にして逃げるのではなく、自己の力をもって危険に立ち向うことである。この力たるや、もちろんわずかなものであったが、ウィリアム・キングの教えをある程度信頼していた数人の織工たちは、力を結集することが可能であり、結集することができたあかつきにはおそらく何かをうち建てうるだけの力が存在するであろうことを指摘した。このようにして彼らは「協同する」ことに決定した。

この協同組合がみづからに課した課題は、一部きわめて遠大なものであったが、そのために

規約の起草者たちはあまりに向う見ずな幻想を描くものとしてとがめられはしなかった。その

課題は、三つの段階で組立てられている。第一の段階である消費協同組合は、ただちに組織に着手すべきものとしてあつかわれている。第二の、組合員の住宅の共同建設、財貨の共同生産および失業組合員による土地の共同耕作等をふくむ生産協同組合の分野も同様に、明らかに最近の将来ではないが、遠くない将来に期待されている。第三の段階すなわち協同組合的移住地は、「実行可能な限り早期に」という条件つきで、さらに先の将来にのぼされている。「かくて組合は、実行できるだけ早く、生産、分配、教育および管理の力を整え、いいかえれば利害をとにもする自立的な移住地を建設し、あるいは他の組合がそのような移住地を建設するのを援助することにとりかかるべきである。」ロッチデールのフランネル織工たちが、彼らの実際の直観から協同組合の三つの本質的分野をこのように理解していたのは、驚嘆すべきことである。第一の消費協同組合の分野では、彼らは簡単でしかも有効な諸方策（わけても購買額による組合員への利益の分配は、とくに人の心を引きつける力のあることが実証された）によって開拓的事業をなしとげた。生産の分野でも彼らは若干の事業に着手しとくに製粉において、またそれにくれて、最初組合結成の基になった紡績および織布の領域でも、いよいよ多くの成果を収めた。しかし生産部門における協同組合の活動の問題（これはあとで述べるが）にとつて特質的なことは、「誠実な開拓者たち」が設立した蒸気紡績工場では、労働者の約半数だけ

が組合員、したがって「株主」であったこと、そしてこれらの人々は次の原則すなわち初めのころロッチデールをくりかえし訪れたヴィクトル・エーメ・ユベールが開拓者たちに関するその研究論文でいっているように、労働には賃銀で満足させ、利益は「企業者および事業の持主としての株主」だけに分配するという原則をつらぬいたことである。そして開拓者たちは、生産と消費とを結合する協同組合的移住地という第三の最大かつ決定的な課題の実現には手をそめなかった。

ロッチデールの制度でなお特別の考慮に値する一つの要素がある。それは協同組合の間の協力、すなわち開拓者たちにより、またのちには彼らと連繋して営まれた数個の協同組合団体および機関の間の協力ということである。「連合主義の原理は」とルーマニアの研究家ムラデナツはその『協同組合学説史』で明らかにブルードンに立脚しながらいっている、「協同組合制度の基礎をなす理念自体から当然に生起する。協同組合が一定の欲求を共同で満たすために人びとを結びつけるのと同じように、種々の協同組合細胞は一定の機能とくに生産および供給の機能を共同で営むために、連帯の原理を適用することによってたがいに結合する。」ここで再びわれわれは社会の構造的更新の基本的原理を見出すのであるが、もちろん消費組合そのものは人びとの生活自体ではなく、一定の諸関心を結合するにすぎないところの協同組合であり、新しい社会構造の細胞となるには適していないと思われる。

現代の經濟生活においてかくも大きな現実となった今日の消費協同組合は、「ユートピア」社会主義の理念から発している。ウィリアム・キングの計画のうちには、不斷に拡大し結合する小さな社会主義の現実を形成することによって、大きな社会主義の現実に到達しようとする傾向が明らかに認められる。しかしキングは同時に、彼の時代にはじまった技術的經濟的變革をすずにはっきり認識していた。彼は機械の中心的意義を認め、それを是認した。彼は機械にたいする一切の暴行を「狂氣と犯罪」として排した。しかし彼はまた、労働者でもある發明家たちが、彼らの「驚くべき發明」によって彼ら自身および彼らの仲間を破滅におとし入れることを知っていた。その理由は、「彼らがその發明を彼らの主人に売ることによって、それを彼ら自身の利益に反して、働かせ、發明を自分たちの手に保持して彼らとともに働かせないからである。」そうするにはもちろん労働者たちが協力して自分たちの協同組合を建設することが必要である。「労働者たちは世界中のあらゆる機械をつくるだけの明敏さをもっているが、しかし彼らはまだその機械を彼ら自身のために働かせるほど明敏ではない。この明敏さはそう長く眠ったままではいけないであらう。」かくして消費の協同組合的組織は、キングにとって生産の協同組合的組織への一段階にすぎないし、これはまた全生活の協同組合的組織への一段階にすぎないのである。

消費協同組合は、創始以来一〇〇年の間に、文明世界のかんりの部分を占めるようになった

が、しかしキングがその内部的發展にかけた希望はまだ満たされていない。たしかに消費協同組合は多くの土地で、一部ではきわめて広い範囲にわたって、自己の必要のための生産を行ってきた。とりわけイギリスではそうであって、二つのものが合同して「ヨーロッパ最大の商業」とよばれている巨大な販売組合が、広大な土地を耕作し、また主要な諸産業を左右している（しかし労働者に利益を分配することはしていない。）またフリッツ・ナフタリが正當に主張するように、生産においても基礎的生產への方面にいよいよ深く浸入する傾向が見られる。しかし包括的な共同体的形態での生産と消費との有機的結合には、ほとんど近づいていない。もっともわれわれは、大消費協同組合もしくはその結合体が、個々の生産部門において生産協同組合を組織し、あるいは既存の生産協同組合に合併している注目すべき実例を見てはいる。しかしそれはたんに技術的な組織であって、眞の協同組合思想の実現ではない。また同様に、広大な地域を占める地域的組合の結合体も、眞の連合的性格を保持するものではなかった。こうした場合、小さな協同組合の多くは、数十年前すでに報告されているように、社会的連帯の独立的な焦点からたんなる構成分子に変わり、その店舗は全組織のたんなる支店に変わった。そのような集中化の技術的利点は明白である。だが考慮すべきことは、技術的經濟的要求と両立しうる限り多くの自主性を個々の組合に保有しようとするいかなる勢力も存在しなかったことである。たしかに人びとはここかしこで、たとえばスイスでは、計画的な分散化によって組合の

「魂の喪失」、いな形骸化の進展に対抗しようといふことはした。しかしたいいの場合、大規模な協同組合制度の経営は、ますます資本主義的経営に類するものとなり、官僚制の原理が、きわめて多くの場合に、かつては協同組合運動の最も貴重かつ不可欠な財宝として尊重された自発性の原理を全く排除してしまつた。このことは、消費組合が国家や地方自治体といふしよに活動することを増してきた国々ではとくに明らかであり、シャルル・ヂードが、羊飼いに装を変えた狼のお伽話を想い起させながら、人は国家を「協同組合化」する代りに、ただ協同組合を「国家化」するようになるという懸念を表明したことは、たしかにまちがいでないはなかつた。

連帯の精神は、人びとの間に生きた関係が保たれている限りにおいてのみ、真に生きていることができる。かつてフェルディナンド・テンニスは、消費組合が共同購入へ、ついで自らの必要のための生産へと進んでゆくことによって、「現存の社会秩序にはっきり対立する経済組織の基礎が据え」られ、それとともに観念的には「資本主義世界は土台からくつがえされる」と考へた。しかし、資本主義の存在形態が協同組合の活動にしみこんでいる間は、「このような観念的な」状態から現実の状態が生成することはありえない。

キングより少しおくれてフランスで生産協同組合の設立を計画したビュッシュも、心の底では同様に「ユートピア」社会主義者であつた。「さしせまつた共産主義的改革は」と彼は一八三一年にその雑誌「ヨーロッパ人」に書いた、「労働者の組合によって成就せらるべきであ

る。」篤信なカトリック教徒でありながら、サン・シモン主義をくぐりぬけ、そこでは急進的社会主義者バザールに親しかつたビュッシュにとつては、生産こそはすべてであり、消費の組織の如きは一つの段階さえも意味しない。彼の信ずるところでは、生産協同組合——ここで、技術の発達についてキングほどの理解をもたない彼は、現代の工業労働者よりも職人を考えている——が、直接社会主義的秩序に通じるのである。「一部の労働者たちが団結し、その貯蓄を合せ、借入金を取得し、自前で生産し、多くの欠乏のもとにありながら借りた資本を返済し、たがいに等しい報酬を確保し、また利益を共同の基金として残し、かくして協同組合の仕事場は小さな産業共同体となる。」小さな産業共同体——ここでビュッシュは、組合から共同体になるといふキングの思想に接近している。ただ彼はたんなる生産協同組合に早くもこの共同体の性格を与えるのにたいし、キングはいさう深い洞察から、そのような可能性をただ完全協同組合にのみ認めている。ビュッシュは簡単な、あまりにも簡単な文句でこう結論する。「すべての労働者にそうさせよう、そうすれば社会問題は解決されるだろう。」彼とても、それでは土地所有という大問題は決して解決されないことをもちろん知っていた。しかし彼は、農業に関する社会的改革の問題の重要性を評価することなく、「農民には土地を、労働者には仕事場を」という公式でお茶をにごした。完全協同組合への発展の問題、構造的更新という決定的問題はキングとちがってビュッシュにはまだ見落されていた。一方ビュッシュは生産協同組合

の社会主義的性格および社会主義的任務を内部から脅かす危険の大部分、とりわけ、発展してゆく協同組合事業の内部における、組合の創立に参与した組合員と後から加入した労働者との間の分化、すなわち協同組合が社会主義を信奉することをどれほど強く言明しようとも、それに資本主義的秩序の附属物という極印を不可避免的に与えることになる分化の進展の危険を、驚嘆すべき鋭さをもって認識した。この危険を除くためビューシユは、彼の最初の実際の経験（一八三二年末）の後に公表した修正プログラムのなかで、二つの対策を立てた。すなわち利益の五分の一を折々に貯蓄することから生ずる「社会的資本」を、譲渡し分割することのできない組合財産として残し、組合は解散しえないものであることを明らかにし、また新しい組合員を加えさせてたえず補充すること、組合は外来の労働者を一年以上賃銀労働者として働かせてはならないとし、その期間後は必要に応じて時々新組合員を受け入れなければならないとするのであった。（一八四〇年ビューシユ派の雑誌「工場」に発表された雛型の契約では、この期間は三ヶ月の見習期間に縮められている。）これら二点のうち第一の点についてビューシユはこういつている、この社会的資本がないと組合は「他のあらゆる商業組合に類するものとなるであろう。すなわち組合は、創立者たちだけに有利で、最初から参加しないすべての人びとにとっては不利となるであろう。なぜなら、組合は結局前の人びとの手ににぎられて搾取の道具となるであろうからである。」このプログラムの要点は、正しく述べられているように、

「二国の全産業資本を吸収し、かくて労働者協同組合による全生産手段の取得を実現すべき」資本の造成を目ざすものであった。ここでもまたわれわれは「ユートピア的」要素を見出すのである。だが、社会的現実を通して社会的現実をつくりだし、そうする権利を政治的方途によって擁護し拡大しようとするのと、政治という魔法の杖だけによって社会的現実をつくりだそうとするのと、帰するところどちらがより实际的であろうか。上の二つの原則は、ビューシユの影響のもとに創立された組合においても、たしかに同じ程度には守られなかった。そして二十年ののちには不分割資本の原則に多くの異議が唱えられたため、それに依然忠実な人たちは一つの困難なまた本質的に効果のない闘いを行わなければならなかったが、それは「所有権を変革し、資本を労働の支配の下に」おくべき原則、協同組合制度が「たんにそのおかげで賃銀生活者から利子生活者になる少数の幸運な創立者たち」だけでなく、全労働者階級の利益になるために守られなければならない原則のための闘いとしてであった。そしてほぼ同じ頃の一八五二年にわれわれは、イギリスの労働者協会創立会の報告のなかでも、全く同様の経験を語る事ができる。だがこれらすべてから結論されることは、中世の類似の経験からと同じく、また他方消費協同組合の歴史における同様の経験からとも同じく、協同組合の内部的問題や組合のうちになお有勢な資本主義的原則の力を、よしとんに漸次的にもせよ克服することは、ひとり完全協同組合において、またそれを通してのみ成就されうることにはほかならない。